

歌集

七彩の夢

なないろのゆめ

代田万知子



歌集

なないろのゆめ

七彩の夢

代田万知子

〈新宴叢書第五十二篇〉

歌集 七彩の夢　　く　　な　　な　　い　　ろ　　の　　ゆ　　め　　く

平成27年10月10日　初版発行

著　　者　　代田万知子

〒五九〇―〇〇二五

大阪府堺市堺区向陵東町三丁八一―三二〇

発行所

株式会社グッドブックス

東京都中央区日本橋三丁一―四―四F

電話　〇三―五二〇―一三六九

FAX　〇三―五二〇―一三七二

編　　集　　市地啓美

装　　丁　　浦谷さおり

印刷製本　シナノ印刷株式会社

©Machiko Daita 2015, Printed in Japan
ISBN978-4-907461-07-2



わくじ

序文・祝歌 大野とくよ

1

精霊の灯……………東京

5

母逝く……………静岡

41

雪とラベンダー……………札幌

81

遍路旅……………大阪(千里)

121

式年遷宮……………伊勢

141

城のある町……………松阪

157

清浄の風……………大阪(堺)

193

四季を詠ふ

213

あとがき

序文

大野とくよ

待ちに待った代田万知子さんの歌稿を手にしたのは二月二十四日火曜日。私にとつて火曜日は、テレビドラマを始め大好きな日となっている。東京の空は晴れ、三月並みの気温である。庭の白梅の花がほぼ満開。外の樹々をみて家に入った直後の荷物到着。相変わらずご丁寧なお便りの外、四国のくきわかめを頂いた。

一気に五百余首の歌を拝見。数が多いとて×のつけられた歌も多く、苦しまれての歌稿の整理。実は令嬢が編集・印刷された由。美しい印刷の文字。人生の限らない旅路。九十七歳逝去との御母上のことは聞き及んでいたが、最後の方になり一連の作を拝見し、こころそそられていった。御兄弟（姉妹）をも大切にされ、又とりわけ夫と生を分かち合う信仰の世界は、全章ほのぼのと影を落としている。『生命の教育』。何時も拝見する御夫君の国への愛、教育の観念をわかりやすく説かれる姿勢に尊く教えられる一人であるが、今の世に希^{のぞ}みを託す一語に心から敬意を表している。

つつしみ深い代田さんは、それを誇らかに歌にはなさらないが、夫との旅の想い出の数首の中に愛の絆を感じた次第である。私の夫の逝去のこと、又歌壇の活動史に目を向け歌にして頂いたことも忘れ難い。とりわけ沼津御用邸（第二回短歌会）には、選者大野への思いをも歌にして頂き、忝なく思つた次第である。同信の方々、ご友人達とのつきあいの深さは、私を母とも思うとのおくりもの等からも生きる勇気をいつも頂いている。

ご自分で消された歌の数々の中にも佳い作があり、思わず○印をつけて了つたが：ご苦心の作を多くの友人達によつてよみつがれていくことを祈るのみである。

思いつきのまま記させて頂き、ご苦心の第一歌集の刊行を心からおよろこび申し上げます。

（平成二十七年二月二十四日夕記す）

祝歌三首

大野とくよ

自らの往く道歌に明かしたもう君が一語を胸に蔵^{しま}えり

明かき声にわがひとり身を案じたもう君が真心に生かされて来つ

『七彩の夢』人の世に希みを与える君なれば天からの夢さずかりません



わくじ

序文・祝歌 大野とくよ

1

精霊の灯……………東京

5

母逝く……………静岡

41

雪とラベンダー……………札幌

81

遍路旅……………大阪(千里)

121

式年遷宮……………伊勢

141

城のある町……………松阪

157

清浄の風……………大阪(堺)

193

四季を詠ふ

213

あとがき

精靈の灯

東京



押し花「幻想」

老いてなほ凜として待つ母ありて生ある中に訪ねよと言ふ

訪ねれば卒寿に近き母笑みぬ次に来る日を乞ふごとくに

精霊の灯

鵜飼舟ゆくりなくして目のあたりひとときは高き歓声あがる

赫赫^{あかあか}と松明^{たいまつ}の炎散る中を鵜はおどり上ぐ愛^{かな}しきまでに

点々と精霊の灯の近づきぬ水面^{みなも}にひろがる幽玄のとき

鵜飼舟異国の人も乗り合ひて片言まじりに語りなごめり

古都を訪ねて

かねてよりの古都を訪ぬる誘^{いざな}ひを友は果たしぬ愛車を駆りて

平安の時代^{とき}の流れを讃ふがに池の水面に映ゆる浄瑠璃寺

ぬかづけば光あまねし九体の御佛座^{みほとけ}します御手^{みで}のやさしさ

友と打つ鐘の響きの魂たまに沁む静けき寺に余韻たなびく

白象に坐する普賢菩薩像感銘深く友と拝をろがむ

二人だけの結婚式

祝婚の饗宴無くも友は今日透析の身越えて結ばる

賛同を得ずして終の愛しさを神前に立ち誓ひ合ひをり

かけ寄りて花束贈る輪の中に花嫁姿の友は笑み立つ

白鳥

雨しげき皇居の堀の白鳥の寄り添ふさまをしばし目で追ふ

皇太子ご成婚寿ぐ影絵あり美術館内光かがよふ

図らずも影絵の原画目のあたり去り難くして時惜しみ佇^たつ

皇居勤勞奉仕

馳せ來たる皇居勤勞奉仕団一期一会の人等輝く

コツコツと御足音おんの近づきて両陛下尊まく目前まに拝かす

頬伝ふ涙そのまま畏かしこみぬ無私の御心みこころ沁み透りたり

両殿下の御まなざしおんのおやさしく言上ごんじやうのわれらにうなづきたまふ